

出すをば、またしく見たりと、友人の物がたれり、江戸にてかの追儼に、薄き板に晴明九字を書き、れと柂を門戸へさし、赤鯛を用ひざる舊家あり、ある島國にて、いと暗き夜、鬼の遊行するとして、戸目籠を持って出るなり、さすれば、それかれ思ふに、節分に箱は出すべきを、お事の日にあやまりし禍なしと、かの島人の話なり、といふ説は是なるべし。

〔年年隨筆^六〕江戸にて、二月八日、十二月八日、芋、菫、小豆などをいれて汁をにる、これをおこと汁と云、二度ともに事はじめ也とも、事おさめなりともいひて、さだかならず、尾張にては、二月は不沙汰なり、骨のなき物をくふ事なりといふ、むじつ講とて、無實の難をまぬかる、義也といひ傳へたり、臘八は釋迦成道の義なりといふは附會なり、おこと、は何事ならんと、年比不審なりしを、出雲國日御崎の神職神西左門行桃が語けらく、出雲にては、十二月十三日に、煤取などやうの正月の事をしそめて、芋、菫、小豆等の汁をくふ、これを事始といふ、さて年神をまつりて、正月廿日に鏡餅を撤却して飯を供す、是を飯くらへと云、二月一日、鱈を供す、是をなますくらへと云、鱈くらへ七日ありて、八日に年神の棚を取、これを事おさめと云、十二月と同じ汁をくふといへり、き、これにて事とは正月の事なることも、初終もよくわかれたり、

〔江戸鹿子^二年中行事^二〕二月 八日 事初 江府中に而籠つる也、

〔増補江戸年中行事^二〕二月 八日 正月事おさめ、江戸中家々に、ざるかごを出す、

〔東都歳事記^二〕二月 八日 正月事納め、家々、箆目籠を竹の先に付て、屋上に立るといふ、或は事始

〔大江俊矩記〕文化六年十二月八日甲午、針供養、こんにやく煮付、

〔日次紀事^{十二}月〕十三日、事始日、今日、正月萬事之經營始修之、俗是謂事始日、正月所用之物亦多買之、

〔江戸鹿子^二御城^二之年中行事^二〕十二月 十三日 御事納御祝 御す、はらい

〔江戸鹿子^二年中行事^二〕十二月 八日 事納 江府中籠つる也、

十二月御事